

社説の意味論

伊 土 耕 平*

Semantics on Editorial Articles

Kohei Ido

要 旨

本稿でパモシホ理論を提案する。これは、社説の意味構造を分析する方法論である。この理論では、社説は4種の文からなると仮定する(仮説A)。すなわち、バ文(=場面・状況を述べる文)、モ文(=問題点を述べる文)、シ文(=主張を述べる文)、ホ文(=その他の補足的説明を述べる文)である。もしこの仮説が一般性が高ければ、誰が分析しても同じような結果が出るはずである。そこで、20編の社説の計522文を5人の者が独自に判定した。その結果を集計したところ、まずまずの割合で判定が一致した。また、社説のありかたを考えると、バ文は最初のほうに多く現われ、モ文は中間に多く現われ、シ文は最後に多く現われ、ホ文は全体に散らばって現われる、と仮定できる(仮説B)。5人の者の判定結果のうち一致度が高い文(計441文)を取出し、一つの社説を10の区間に分けたとしてどの区間にどの役割が多く出現するかを調べると、仮説の通りになった。

I はじめに

ここでは「意味論」という語を「意味構造分析の方法論」の意で用いることとする。そして社説の「意味」とは、社説によって伝えられる「伝達内容」のこととする。つまるところ「社説の意味論」とは、社説の伝達内容の構造を明らかにする方法のことである。

本稿で「パモシホ理論」を提案したい。これは上の意味での意味論であって、社説の意味構造を「ホホババモ……」などと分析するものである。「バ」とは「場面・状況文」の略である。「モ」は「問題点・注目点文」、「シ」は「主張文」、「ホ」は「補助・補足文」の略である。これらの文の分布として、社説の伝達内容の構造を記述しようとするものである。この理論については第II章で述べる。

第III章では、この理論のうち「パモシホの仮説A」を検証する。もしこの理論(=方法)が一般性の高いものであれば、誰が分析しても同じような結果が出なくてはならない。そこで私も含め5人が20編の社説を読み分析を行なった。その結果の一致度を示す。

第IV章では、具体的にどのような分析が行なわれたのか、1例を挙げる。同時に、この理論の問題点も示す。

第V章では、「バモシホの仮説B」を、Ⅲ章の調査で得られたデータを利用して検証する。同時に、私が以前行なった調査のデータと比較する。

Ⅱ バモシホ理論

社説は、社会に起きているいろいろな事象を取り上げて、それについての自分（その新聞社の担当者）の意見を述べるものである。したがって、基本的には次のような構造を持っていると考えられる。¹⁾

まず最初に、取り上げようとする事象を示さなくてはならない。例えば「国会が始まった」「企業の決算期が近づいてきた」など。これは要するに、事象も含めて、意見を主張する時点での場面・状況を示すのである。

次に、場面・状況に含まれている、または関連する、問題点や疑問点、注目点を指摘する。例えば「重要な証人喚問が行なわれる」「バブル失敗の責任を自覚する経営者がほとんどいない」など。問題点などはたいてい複数ある。問題点を絞りこんで論じたほうが、説得力があるわけである。

最後に、意見を主張する。「疑惑を解明しなくてはならない」「今度の株主総会を見守りたい」など。

そして、それぞれの段階で、必要があれば補足説明をする。例えば「〇〇首相就任後、初めての国会である」「決算とは学生にとっての試験のようなものだ」など。補足説明は随時行なわれるのであるから、文章の全体にわたって現われるはずである。

以上のことから、二つの仮説が導きだされる。一つは、社説には最低限、状況や場面を述べる文、問題点や注目点を述べる文、主張を述べる文、その他の補足的説明を述べる文の4種がある、というものである。それぞれ「バ文」「モ文」「シ文」「ホ文」と呼ぶことにしよう（「文」という語を略すときもある）。この仮説を「バモシホの仮説A」と呼ぶことにしよう。「バモシホ」とは、文が担う「役割」のことである。

一つ一つの社説は「ババホホモホホ……」などと分析されることになるが、これではあまりに平板的な分析であると批判されるかもしれない。この批判は甘んじて受けるしかないが、後述することからわかるように、バモシホ理論は一つ一つの社説の分析よりも、多くの社説を分析し全体の傾向を出すときに強みを発揮するのである。

もう一つの仮説は、社説は一般的に言って次のような構造を持っている、というものである。

最初のほうにバ文が多く出現し、次にモ文が多く出現し、最後にシ文が出現する。ホ文は全体に散らばって出現する。

この見方を「バモシホの仮説B」と呼ぶことにしよう。以上の二つの仮説がバモシホ理論の中心である。仮説とは言っても、常識を少しも越えないものであるが。

バモシホの判定は、今のところ人間がするしかない。するとどうしても主観的な部分が出てくる。その主観性を排除するためには、複数の人間が判定をし、平均的な判定を求めるのが常道である。

また、「役割」は細分すればきりがなであろう。本稿ではなるべく単純化することとし、社説にとって重要であると考えられるバ・モ・シをまず設定し、それ以外のあまり重要でないものはホとして一括することとしたのである。

なお、バモシホの仮説を除くと、バモシホ理論の残りはいくつかの処理手順だけである。それらについては、Ⅲの1で述べる。

Ⅲ 検証 その1

ここではバモシホの仮説Aを検証する。すでに述べたが、もしこの理論が十分に一般性が高いのであれば、誰が分析しても同じような結果が出るはずである。そこで私も含め5人が分析して、判定の一致率を見た。以下、その手続きと結果について述べる。

1. 手続き

用いた社説は『朝日新聞』と『産経新聞』の1993年2月1日から5日までに掲載されたものすべてである。毎日2編ずつ掲載されるので、計20編となる。一つ一つの社説に20～40個程度の文が使われているので、結局、合計522個の文が判定対象となった。

判定者には社説のコピーと、次のような指示を渡した(原文のまま)。判定者は、大学生4人と、私とである。

作業：それぞれの社説を読んで、一つ一つの文(一つの社説あたり20～40個くらい)について「バ・モ・シ・ホ」のいずれであるか、記入してください。「バ・モ・シ・ホ」とは次のような意味です。

バ：場面・状況文。社説の筆者がその主張をする時点での具体的状況(下の例文中の文②)、およびその状況を構成する個別的事象を述べた文(同③)。

モ：問題点・注目点文。その時点で筆者が問題にしていることや、注意すべきであると考えていることを述べた文(同⑦⑧)。

シ：主張文。筆者が主張したい意見(感想も含む)を述べた文(同⑩)。題名(=見出し)を参考にしてもよい。ただし、あくまでもその社説全体から判断する。全体に関わらない、その場限りのものは「ホ」とする(同⑪)。

ホ：補助・補足文。さまざまな補足的事柄・補足説明を述べた文。具体的には、枕の話など(同①)、注釈的説明(同⑤)、具体例や細かい部分の説明(同④)、一般的な原理や定義など(同⑥)、全体に関わらないその場限りの部分的な感想・意見(同⑪)。

例文「政治改革を執行せよ」という題名の社説(伊土の作文)

①春のたよりが聞かれるようになった。②昨日、臨時国会が開かれた。③各党の代表質問が行なわれた。④A党のB氏がC事件の証人喚問を要求した。⑤ちなみに今国会はちょうど百回目の国会である。⑥国会は国の立法府である。⑦ところで首相は政治改革を約束していた。⑧しかしどこまで実行できるか。⑨それでも次のように言いたい。⑩「政治改革は実現されねばならない。公約を果たせ」。⑪ついでに減税もせよ。

1.ホ 2.バ 3.バ 4.ホ 5.ホ 6.ホ 7.モ 8.モ 9.シ 10.シ 11.ホ

注意：

- 「バ・モ・シ・ホ」は相対的なものである。例えば補足説明であっても筆者が特に問題視している(と考えられる)のであれば「モ」とする(「ホ」ではなく)。
- 会話文は全体で一つの修飾語と考え「～と言う」などの表現が含まれている文とペアにする。そして同じ記号をつける。例えば文⑩はカッコ内全体で一つの文と考え文⑨とペアにして同じ記号をつける(この場合「シ」)。
- 指示語などが含まれているときは指示内容を含めて考える。例えば、文⑨の「次」は文⑩を指すので、文⑨は「それでも『…公約を果たせ』と言いたい」という内容の

文として考える。

※ どうしても決められないときは「？」と記入して下さい。

記号記入欄：(略)

判定者には「人と相談せず、自分で判断して記入せよ。絶対的な正解があるわけではない」とだけ指示した。また、社説の一つ一つの文には文番号をふっておいいたので、判定者が形式的なことでも悩む心配はない。

ところで、上の「注意」事項がバモシホ理論の処理手順の部分である。文章分析において会話文や指示語をどう扱うかは問題となるところであるが、それらは地の文があってはじめて生きるものであるから、地の文に従属させることにした²⁾。

2. 結果

判定対象となった文は総計522個である。さっそく文ごとに一致率を出してみたところ表1のようになった。バ・モ・シ・ホの違いは無視してある。

5人全員が一致しているのは23.6%にすぎないが、4人以上で見ると48.9%ということになる。3人以上であれば、84.5%が一致していることになる。

表1 判定の一致率

5人が同じ判定	123文(23.6%)
4人 "	132文(25.3%)
3人 "	186文(35.6%)
2人以下"	81文(15.5%) ³⁾

計 522文(100.0%)

表2 ランダムに選んだ場合

5人が一致	4通り(0.4%)
4人 "	60通り(5.9%)
3人 "	360通り(35.2%)
2人以下	600通り(58.6%)

計 1024通り(100.1%)

この数字を厳密に評価するのは難しい。仮に、5人の者がまったくランダムに一つの文のバモシホを選んだとすると、組合せ数は $4^5=1024$ 個である。うち、5人が一致するのは、バカモシホだけなので、4通りである。4人が一致するのは、5人の中から4人を選び4個のうちどれかを選ばせ(4人とも同じもの)、残り1人は残り3個のどれかを選ばせるので、 $5 \times 4 \times 3 = 60$ (通り)である。3人が一致するのは、5人の中から3人選んで(10通り)4個のうちどれかを選ばせ、残り2人は同じものを選ぶか(3通り)、別のものを選ぶか(3×2 通り)であるから、 $10 \times 4 \times (3 + 6) = 360$ (通り)となる。確率を出すと表2のようになる。

表1と表2を比較すると、4人以上一致する率は、今回の調査の方がはるかに高い。3人以上で見ても、今回の方がほぼ2倍高率である(84.5対41.5)。よって、今回の調査はまずまずの一致率であったと考えて良いと思う。少なくとも、ランダムではないことは確かである。

さらに、判定者のうち4人はバモシホの判定経験がないこと⁴⁾、判定者と事前に協議して判断基準をある程度統一しておけば一致率をもっと上げることができたであろうこと、などを考えれば、表1は厳しい条件での数字であると言える。この点からも、まずまずの一致率であったと考える。

以上のことから、バモシホ理論の仮説Aは妥当であると結論する。

IV 具体例

さて、ここで、実際の社説を一つ掲げ、具体的にどのような分析となるのか、説明することにして。『朝日新聞』1993年2月2日の社説である（文番号を付す）。

子供の不幸は時代を映す

①民俗学者の柳田国男は、子供の世界を深く理解する人であった。

②彼は「児童は私が無く、また多感である故に、その能力の許す限りにおいて、時代々の文化を受け入れる」と考えた。

③そこから、それぞれの時代の文化を、子供を通していきいきと描き出した。④それは、子供が幸福な時代のことだった。

⑤いま、子供の不幸がさまざまに論議されている。⑥最も極端な例がいじめや虐待だ。

⑦ときには、子供の生命が奪われることもある。⑧放置できない事態が続いている。

⑨厚生省が九三年度から、新しく主任児童委員を委嘱することにした。⑩地域ごとに、子供がかかえる複雑な問題の相談、調整役をしてもらうという。

⑪評価すべきひとつの試みだが、いまの事態には、文部省とも協力し、縦割り行政を超えて、取り組む姿勢が必要だろう。⑫きめ細かい対応とともに、幅広い視点からの考え方も要請されよう。

⑬柳田がいうように、子供は敏感に時代の文化、社会を映す。⑭幸福な部分とともに、不幸をも鮮明に映す。⑮子供の「病気」は、日本社会のかかっている「病気」の反映でもあろう。

⑯弱者という面からこの問題を考えてみたい。⑰子供は家庭でも社会でも、大人に対して弱者である。⑱学校では先生に対して弱者であり、子供同士のあいだでも、さまざまな弱者が作られていく。

⑲波止場の賢人と呼ばれた米国の学者エリック・ホッファーが示唆に富む考察をしている。⑳彼は独学の人だった。㉑沖仲仕をしながら、政治や社会について文明論的文章を書き続けた。㉒著書『情熱的な精神状態』でこういう。

㉓「権力は腐敗すると、しばしばいわれてきた。しかし、弱さもまた腐敗することを知るのは、ひとしく重要であろう。権力は少数者を腐敗させるが、弱さは多数者を腐敗させる。……弱者は邪悪を憎むのではなく、弱さを憎む。……弱者が、弱者をえじきにするときの、あの酷薄さ」

㉔自らを、弱者の立場に置いてきた人だけに、容赦のない指摘だ。㉕ファナチズム（狂信主義）を論じたものだが、一般論としても通用する。

㉖子供の無邪気さとともに、そのずるがしこさ、残酷さはしばしば経験することだし、身におぼえもあろう。㉗それはまた、二重三重に弱者の立場に置かれる子供たちの、自己保身の反応でもある。

㉘自分が弱者であるかどうか。㉙これは一面では、それを意識するかどうかだ。㉚しかし同時に、まわりが彼を弱者にしたてるかどうかにもかかっている。

㉛私たちの社会は、その弱者を過剰につくってきたのではないか。

㉜ホッファーが、打開策として説いたのは、「自尊心」と「思いやり」だった。㉝ここでも彼の説に耳を傾けてみよう。

㉔「自らの足で立つ個人は、彼が自尊心を失わないかぎり安定している」㉕「加害者になることから、われわれ自身を守るための最善の理由のひとつは、思いやりの能力を保持することである」

㉖いまの子供の置かれている環境は決して容易なものではない。

㉗幼いころから、受験のための教育体制が子供の逃げ場をなくしている。㉘家庭も緩衝地帯になるどころか、むしろ加速する場になっている。㉙児童虐待の相談は、東京だけでも年間百件を超えるという。

㉚弱者を拡大するこの序列社会を、少しずつ変えていかねばなるまい。

これら①から④⑩までの文について、一つ一つパ・モ・シ・ホのいずれであるか、判定していくのである。5人の判定結果を一括して表3に示す。

では、この社説はどのような意味構造を持っているのか。3人以上が一致している文はその判定を採用し、3人以上一致の判定がない文は「?」で示すと、この社説は、

ホホホホバ?ホ?バホ??シシシ?ホホホ……

という構造を持っていることになる。これが、バモシホ理論によって一つの社説を分析した結果である。このように、バモシホという役割の分布によって意味構造を捉えるのである。この方法では文章の立体的な構造は記述できないが、すでに述べたように、一つ一つの社説の分析よりも、多数の社説の傾向を見ることのほうに、バモシホ理論の存在理由があるのである。

表3 5人の判定結果

文	判定(人)	文	判定(人)	文	判定(人)	文	判定(人)
1	ホ5	11	モ2 シ2 ホ1	21	ホ5	31	モ4 シ1
2	ホ5	12	シ2 ホ2 モ1	22	ホ5	32	ホ4 モ1
3	ホ5	13	シ3 モ1 ホ1	23	ホ3 モ1 ?1	33	ホ4 モ1
4	ホ5	14	シ3 モ1 ホ1	24	ホ5	34	ホ3 モ2
5	バ4 モ1	15	シ3 モ1 ホ1	25	ホ5	35	ホ3 モ2
6	モ2 ホ2 バ1	16	モ2 ホ2 バ1	26	ホ4 モ1	36	モ4 バ1
7	ホ3 バ1 モ1	17	ホ3 バ2	27	モ3 ホ2	37	バ2 モ2 ホ1
8	バ2 モ2 ホ1	18	ホ3 バ2	28	ホ3 モ2	38	バ2 モ2 ホ1
9	バ4 ホ1	19	ホ4 モ1	29	ホ3 モ2	39	ホ3 バ2
10	ホ4 バ1	20	ホ5	30	ホ4 モ1	40	シ5

実は、この社説は一致率が平均値に近いものである。すなわち、全体は40文であるが、そのうち5人一致している文が10個で25%、4人一致している文も10個で25%、3人一致している文が13個で32.5%である(表1の平均値と比較していただきたい)。

判定がまちまちとなっている文をいくつか見ることにしよう。文⑥の「いじめや虐待」は、状況に含まれる問題点と考えればモであるし、単なる具体例と考えればホであるし、状況の一部を構成するものと考えればバである。私自身は、バ(=⑤文)に続いていること、いじめ・虐待は重要な問題であること、この二点からモとした。

文⑦は「ときには……こともある」というように追加的な表現がなされていることから、ホとした人が多かったのであろうが、「子供の生命が奪われる」ことはやはり重大なことである。私自身はモとした。文⑧も同様に私はモとした。

文⑩⑪は、問題点と言えば問題点であるが、筆者の感想と考えればシである。しかし、全体の要旨(=子供の不幸は時代を映す)からするとあまりに細かいことではなかろうか。私自身

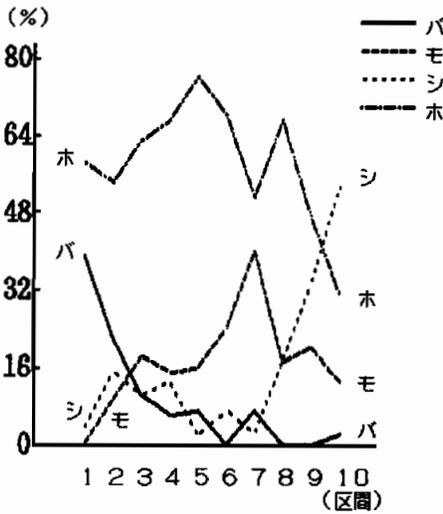


図1 パモシホの分布

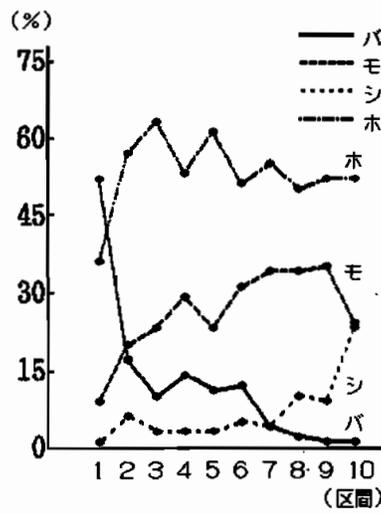


図2 抽稿1992の結果

はホとした。

以上のように、バモシホの判定は人間が主観にもとづいて行なうものであるから、どうしてもゆれが生ずる。この点がバモシホ理論の最大の問題点である。しかし、すでに述べたように、事前に判定基準を統一しておけばかなり一致度は高くなるであろう。いわば程度の問題である。

さらに、次章の「検証その2」からも、バモシホ理論は価値があると考えられる。

V 検証 その2

バモシホの仮説Bは、次のようなものであった。

最初のほうにバ文が多く出現し、次にモ文が多く出現し、最後にシ文が出現する。ホ文は全体に散らばって出現する。

この仮説を今回得られたデータで検証してみよう。そのために「区間」という項目を設定する。「区間」とは、次の式で求められる値の小数点以下を切り上げたものである。

$$(\text{その文の番号}) \div (\text{その文章全体の文数}) \times 10$$

例えば、30個の文からなる社説であれば、文①～文③が区間「1」、文④～文⑥が区間「2」……となる。要するにこの数値は、全体を十等分したときその文がどのあたりにあるかを示すものである。

さきのデータのうち、役割の認定が3人以上一致したものだけを取り出し(計441文となる)、それらすべての文について区間を算出し、区間ごとにバモシホ

表4 区間ごとバモシホの個数・割合

区間	バ	%	モ	%	シ	%	ホ	%	合計
1	15	39	0	0	1	3	22	58	38
2	10	22	4	9	7	15	25	54	46
3	4	10	7	18	4	10	25	63	40
4	3	6	7	15	6	13	32	67	48
5	3	7	7	16	1	2	34	76	45
6	0	0	10	24	3	7	28	68	41
7	3	7	18	40	1	2	23	51	45
8	0	0	8	17	8	17	32	67	48
9	0	0	9	20	15	33	21	47	45
10	1	2	6	13	24	53	14	31	45
全体	39	8.8	76	17.2	70	15.9	256	58.0	441

の個数および割合（その区間の合計に対する）を出すと表4のようになる。それをグラフにすると、図1のようになる。

図1からわかるとおり、最初のほうではバ文が多く、遅れてモ文が増え、最後にシ文が増える。ホ文は全体にわたって分布する。このように、きわめて大まかにではあるが、仮説Bは正しいと証明できる。

ちなみに、私は以前『朝日』『毎日』『読売』三紙の社説計60編を調査して、今回と同様の方法でまとめた（拙稿1992）。結果の一部を図2として再掲する。全体の傾向は、これもまた大まかにではあるが、今回と同じである。今回のほうがずっと仮説に近い分布である。今回のほうが全般的にホの割合が高い、シのあがり方が高い、シが最初で高くなっている、など、違いもあるが、これらは程度の違いにすぎない。前回は判定者が私だけであり、判定の客観性が問題視された。今回5人で判定して同じような結果が出たことは、バモシホ理論が一般的であることの一つの証拠になると思う。

大変興味深いことは、モがピークに達するのが後半であることである。問題点を最初にずり言うことよりも、後半でゆっくりと指摘することのほうが多いのであろうか。

以上のことから、社説の平均的な意味構造を抽象することができる。仮に30文からなる社説であれば、例えば、

1～2区間にバが2個、3～5区間にモが1個、2～4区間にシが1個、6～7区間にモが2個、8～9区間にモが1個、9～10区間にシが3個。残りはすべてホ。

などようになる（個数はすべて概数である）。これは、表4において33%が文一つに相当すると考えて算出したのである（合計30文であれば1区間あたり3個で、文1個は33%にあたる）。

VI おわりに

本稿で述べたことをまとめておく。

- ①社説は4種の文からなるという仮説（バモシホの仮説A）は、5人による判定の、一致率の高さから見て一般性がある。
- ②社説においては「バ→モ→シ」の順で出現し、ホは全体に散らばるといふ仮説（同B）は、区間ごとのバモシホの分布から見て正しい。

最後に本研究の位置づけを簡単にしておく。これまで、段落単位で文章を分析することは盛んに行なわれてきた。段落どうしの接続関係や、包含関係などが分析されてきた。それに対して本稿では、段落の枠を外し、文の担う役割の分布として文章の意味構造を分析しようとする。

もっとも、文章を文の連続として見る研究もこれまで少なからずあった。有名なものでは永野賢の連鎖論・接続論（永野1986が総決算）がある。しかしその研究では、一つ一つの文に役割を認めるという方法はとらない。

一つ一つの文に役割や機能や意図などを認める研究としては、市川1978・樺島1979・土部1985・畝田谷1986などがあるが、いずれも本稿の方法とはかなり異なる。

バモシホ理論は社説というきわめて限定された対象にしか適用できない。その意味では一般性が低い理論である。しかし、研究はやりやすいところから始めるしかない。社説という、等質な文章が複数集められる対象から始めるのはやむをえないことである。今後「役割」を増やすなどして対象範囲を拡げていきたいと思う。

また、『朝日』と『産経』の違いを記述すればバモシホ理論による文体論が可能となる。これもおもしろいテーマであるが、今後の課題である。

Summary

In this paper, I propose "BA-MO-SHI-HO theory". It is a method in order to analyse the structure of editorial articles. "BA" means "BAMEN-JOKYO BUN", sentences used to explain the state of affairs. "MO" means "MONDAITEN-CHUMOKUTEN BUN", sentences used to focus on the point at issue. "SHI" means "SHUCHO BUN", sentences used to express the writer's opinion. "HO" means "HOJO-HOSOKU BUN", sentences used to supplement other sentences. It is assumed that "BA" is distributed in the initial part, "MO" is distributed in the middle part, "SHI" is distributed in the final part, and "HO" is distributed in the whole. Five analysers analysed 20 articles (522 sentences). And the assumption proved to be true.

注

- 1) この仮説については拙稿1992にすでに述べた。ただし文面はかなり違っている。
- 2) これは永野1986 (p. 91) の扱いと同じである。
- 3) 「2人以下」とは、例えば「2人がモ、2人がホ、1人がシ」「2人がホ、1人がモ、1人がバ、1人が？」など。ちなみに「？」は全体で3個あった。
- 4) ただし、判定者(学生)のうち2人は、バモシホ理論の概要は知っている。

文 献

- 市川 孝 1978『国語教育のための文章論概説』教育出版
 伊土耕平 1992「論説文の意味構造」『奈良大学紀要』20
 歌田谷桂子1986「論説文の文段中心文と文段にみられる特徴」『国際学会友会日本語学校紀要』10
 樺島忠夫 1979『日本語のスタイルブック』大修館書店
 永野 賢 1986『文章論総説』朝倉書店
 土部 弘 1985「文の機能と文章の叙述層」『国語表現研究』2

付 記

今回の調査に協力して下さった松村悠子・道本弘美・横谷 文・脇坂峰人の諸氏に感謝いたします。また、統計学に関する筆者の質問に答えて下さった中川寿夫先生に感謝いたします。

